

# 鹿児島市の大気汚染調査（第24報）

## 平成22年度調査報告

上山 由貴<sup>\*</sup> 南 有紀<sup>\*</sup> 大山 謙二<sup>\*\*</sup> 中島 常憲<sup>\*\*\*</sup> 高梨 啓和<sup>\*\*\*</sup> 大木 章<sup>\*\*\*</sup>

### Air Pollution in Kagoshima City (Part 24) Investigation from April 2010 to March 2011

Yoshiaki UEYAMA<sup>\*</sup>, Yuki MINAMI<sup>\*</sup>, Kenji OHYAMA<sup>\*\*</sup>, Tsunenori NAKAJIMA<sup>\*\*\*</sup>,  
Hirokazu TAKANASHI<sup>\*\*\*</sup> and Akira OHKI<sup>\*\*\*</sup>

Air pollution in Kagoshima City from April 2010 to March 2011 was investigated with particular emphasis on the falling dust (volcanic ash fall) from Mt. Sakurajima. The falling dust was collected monthly with rainwater at eight locations in Kagoshima City. After the sample had been filtered, the residue was dried and weighed, and the filtrate was analyzed for  $\text{SO}_4^{2-}$ ,  $\text{Cl}^-$ , and water-soluble matter, as well as for pH. The average monthly falling dust at the eight locations in Kagoshima City was  $62.4 \text{ g}\cdot\text{m}^{-2}\cdot\text{month}^{-1}$ , which was about 1.5 times as much as that observed in the last fiscal year, and was the highest since 1993. The concentration of  $\text{NO}_2$  in the air was measured by use of the "filter-badge method". The average  $\text{NO}_2$  concentration at the eight locations was 8.4 ppb, which was somewhat higher than that for the last year.

**Keywords:** air pollution, Kagoshima City, falling dust,  $\text{NO}_2$

### 1. 緒言

著者らは、昭和53年度（1978年度）より、鹿児島市および桜島地区の降下ばいじん量・降下ばいじん成分および大気中の二酸化イオウ濃度などを、桜島の火山・噴煙活動による大気汚染という観点から調査してきた。昭和62年度（1987年度）より降下ばいじん量の観測地点を鹿児島市内のみにしほり、主として工場や自動車の排ガスに起因すると考えられる二酸化窒素汚染の調査も加えて、鹿児島市内（桜島地区を除く）の大気汚染という観点から調査を行なっている<sup>1)</sup>。本論文では、平成22年度（2010年度）の調査結果を報告する。

### 2. 実験方法

図-1に示す鹿児島市内8ヶ所の測定地点を設定し、英國規格のデポジットゲージ<sup>2)</sup>に準ずる降下ばいじん捕集器（ロートの直径約30cm、容器の容量20L、ガラス製）を設置して、毎月末に降下ばいじん・雨水混合試料を採取した。サンプリング地点1は4~6月までは吉野中学校であるが、7~3月は近接の鹿児島市北部保健センターにて採取した。採取試料をろ過し、ろ液について降水量(Lおよびmm)・ $\text{pH}$ ・ $\text{SO}_4^{2-}$ 濃度・ $\text{Cl}^-$ 濃度を測定し、ろ液の蒸発残さ分から降下ばいじんの可溶性成分を求めた<sup>3)</sup>。 $\text{SO}_4^{2-}$ 濃度と $\text{Cl}^-$ 濃度は、イオンクロマトグラフィー法に

2011年8月23日受理

\* 博士前期課程化学生命・化学工学専攻

\*\*技術部 生産技術系

\*\*\*化学生命・化学工学専攻

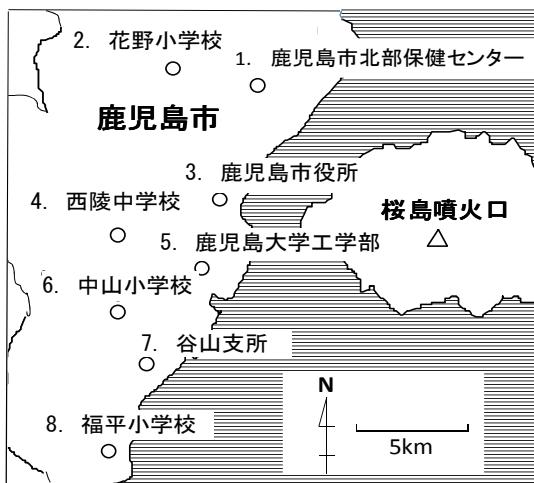


図-1 サンプリング地点

より測定した。これらにデポジットゲージへの捕集量(ろ液の容量)を乗じて各成分の降下量を算出した。ろ過残さを不溶性成分とし、可溶性成分との合計を降下ばいじん量とした<sup>3)</sup>。

一方、上記8ヶ所の測定地点において、アルカリろ紙法(フィルターバッジ法)<sup>4)</sup>によるNO<sub>2</sub>濃度の測定を2ヶ月毎に行なった。東洋ろ紙(株)製フィルターバッジNO<sub>2</sub>を各測定地点に3個ずつ、地上より1.5～2.0mの位置に設置した。24h暴露後、NO<sub>2</sub>を吸収したアルカリろ紙をバッジケースより取り出して、文献記載<sup>4)</sup>の方法でNO<sub>2</sub>の1日平均濃度を算出し、3個の平均を測定値とした。鹿児島市役所(測定地点No.3)に設置されている窒素酸化物自動測定記録計(京都電子工業(株)NX-48)および谷山支所(測定地点No.7)に設置されている記録計(電気化学計器(株)GRH-74H)の測定結果とフィルターバッジ法による結果とを比較した。

### 3. 結果と考察

測定結果を表-1～8に、8測定地点の平均値を表-9に示す。1年間の測定中にはやむをえぬ事情で欠測値となった場合もあったが、そのデータを除いて平均値を求めた。

#### 3.1 降下ばいじん量

図-2に、平成22年度(10年度)の鹿児島市内8測定地点平均の月別降下ばいじん量を示す。また、図-3～6に測定地点別の月別降下ばいじん量を示し、図-7に各々の地点の年平均降下ばいじん量をまとめた。図-8に、鹿児島市内平均と桜島全島

平均の年度別降下ばいじん量を示す。大都市における降下ばいじん量は一般に5g·m<sup>-2</sup>·month<sup>-1</sup>前後であるが、鹿児島市における降下ばいじん量はこの値よりかなり多い場合が多く、桜島起源の火山灰の寄与が大きい。

表-9より、10年度の鹿児島市内8測定地点の年平均降下ばいじん量は、62.4g·m<sup>-2</sup>·month<sup>-1</sup>であり、09年度の40.4g·m<sup>-2</sup>·month<sup>-1</sup>と比較しかなり増加した。興味深いことに、市内北部(No.1～3)では、降下ばいじん量の増加が大きいが、それ以外の地域では、09年度と同等かそれより低かった(図-7)。市内の降下ばいじん量の分布傾向は、100g·m<sup>-2</sup>·month<sup>-1</sup>を超える降下ばいじん量を記録していた92年度以前のものと類似していた。図-8に示すように、10年度は93年度以降で最大の降下ばいじん量であり、08年度から始まった降下ばいじん量の増加傾向が10年度も続いている。

図-9に、鹿児島地方気象台提供の資料よりまとめた桜島の月別爆発・噴火回数および火山性地震回数を示す(爆発・噴火は、鹿児島地方気象台の定義で以下のとおりである。爆発：音、体感空振、噴石、爆発地震のいずれかがあり、微気圧計に感じるもの；噴火：鹿児島地方気象台分類の噴煙量3以上のもの)。10年度の爆発771回、噴火910回は、09年度の爆発880回、噴火1134回に比べてやや少ないが、

表-1 鹿児島市北部保健センター(吉野中学校)

月	降水量		pH	不溶性成分 a)	可溶性成分 a)	降下ばいじん量 a)	Cl <sup>-</sup>		SO <sub>4</sub> <sup>2-</sup>		NO <sub>2</sub> ppb
	1	mm					a)	b)	a)	b)	
4	15.1	219	4.9	394.6	9.2	403.8	0.43	1.8	2.04	8.7	-
5	18.3	266	5.1	42.3	7.1	49.4	0.47	1.5	1.10	3.6	0.9
6	-	c)	5.7	206.3	11.2	217.5	1.10	1.4	2.50	3.3	-
7	-	c)	5.7	248.8	13.0	261.8	0.40	1.1	1.66	4.2	3.6
8	12.1	176	5.1	535.1	7.3	542.4	0.90	4.9	3.90	20.7	-
9	8.2	119	5.1	35.3	6.0	41.3	0.20	1.4	0.30	2.4	1.7
10	5.5	80	5.4	31.4	0.7	32.1	0.20	2.5	0.20	2.3	-
11	2.0	29	4.8	80.2	2.1	82.3	0.10	2.9	0.20	6.1	3.4
12	13.0	189	4.7	29.7	6.2	35.9	1.00	6.3	0.40	2.5	-
1	-	d)	-	17.0	-	17.0	-	-	-	-	7.9
2	6.1	89	5.8	125.2	3.1	128.3	0.20	2.4	0.60	6.0	-
3	3.1	45	5.9	194.3	2.6	196.9	0.60	16.0	0.30	7.0	4.3
Av.	-	-	5.3	161.7	6.2	167.4	0.51	3.8	1.20	6.1	3.6

表-1のNO<sub>2</sub>濃度の測定日は、上より平成22年6月1日、8月10日、10月1日、11月30日、平成23年2月2日、4月7日である。a) g·m<sup>-2</sup>·month<sup>-1</sup>; b) mg/L; c) 降水量が容器オーバーのため欠測値とした。可溶性成分、塩素イオン、硫酸イオンの値は鹿児島地方気象台測定の降水量(875mm(6月)、460mm(7月))をもとに算出した; d) 降水量が0mmであったため、降下ばいじん量と不溶性成分以外の項目は欠測値とした。以下の表(表2～7)も同じである。



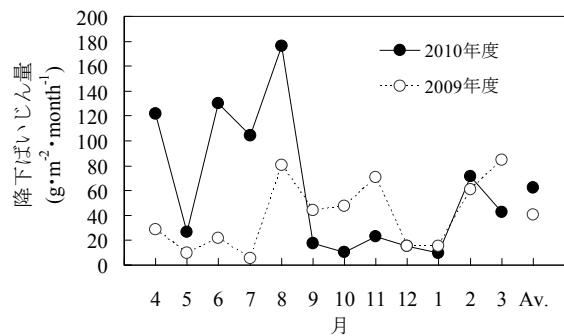


図-2 鹿児島市8地点平均降下ばいじん量

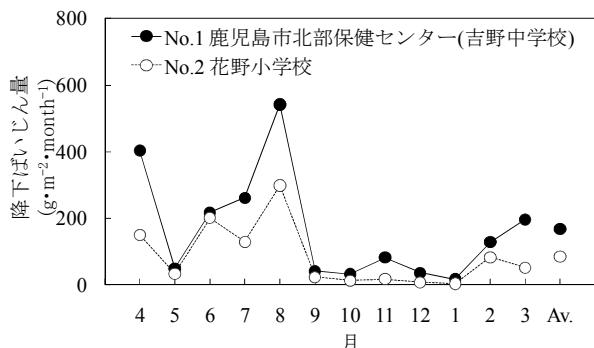


図-3 No.1, No.2における降下ばいじん量

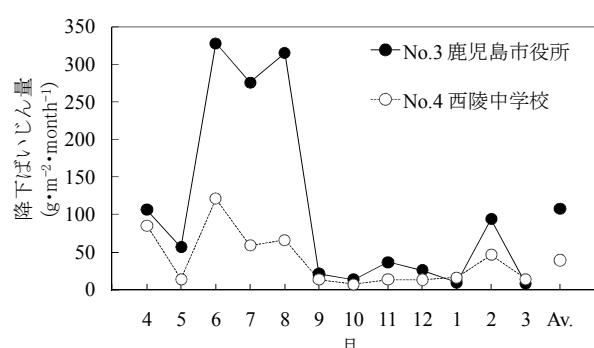


図-4 No.3, No.4における降下ばいじん量

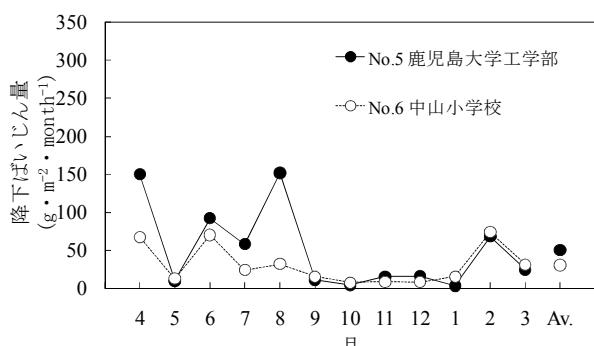


図-5 No.5, No.6における降下ばいじん量

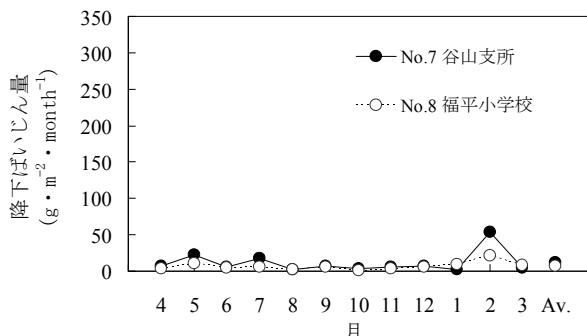


図-6 No.7, No.8における降下ばいじん量

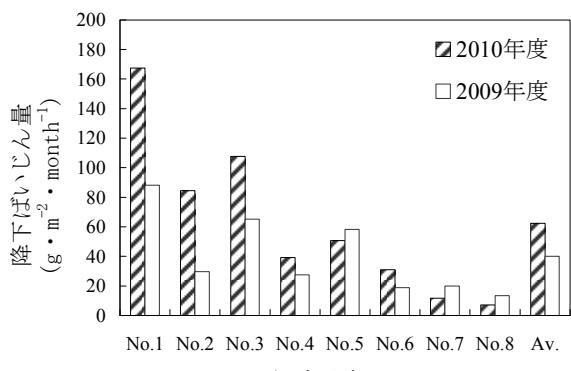


図-7 測定地点別の年平均降下ばいじん量

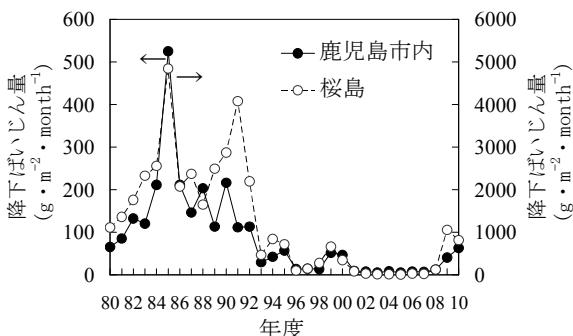


図-8 鹿児島市内および桜島全島平均の年度別  
降下ばいじん量

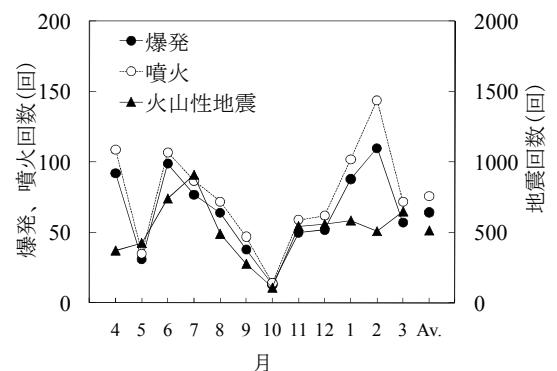


図-9 桜島火山の爆発、噴火、および火山性  
地震の回数

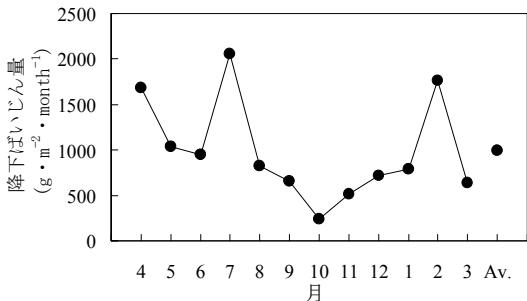


図-10 桜島14地点平均降下ばいじん量

火山性地震（10年度6175回、09年度6146回）は同程度であった。

図-10に、鹿児島県消防防災課提供のデータよりまとめた桜島全島（高免、園山、黒神、有村、湯之、持木、桜島口、小池、湯之平、武、西道、二俣、二俣上、赤水の14測定地点）における月別平均降下ばいじん量を示す。これらの測定地点は桜島のほぼすべての方向に平均して配置されており、図-10に示す降下ばいじん量の月別変動は、季節的な変動というよりも桜島の活動そのものを反映しており、図-9に示す桜島の活動とほぼ対応している。10年度の桜島全島の年平均降下ばいじん量は989 g·m⁻²·month⁻¹であり、09年度の1051 g·m⁻²·month⁻¹と同程度であった。

桜島全島の降下ばいじん量は、92年度に2192 g·m⁻²·month⁻¹を記録して以来、低下傾向を示し、特に02～07年度は非常に低い値であった。しかしながら、08年度から増加傾向に転じ、09年度および10年度とも1000 g·m⁻²·month⁻¹前後の降下ばいじん量であった。昭和火口が2006年6月に活動再開したが、この活動は年々盛んになっており、09度および10年度の高い降下ばいじん量に反映している。また、桜島全島の降下ばいじん量は10年度と09年度は同程度であるが、市内の降下ばいじん量が増加している原因としては、特に夏期に東風が多かったためと考えられる、このため、市内北部において夏期に特に高い降下ばいじん量となつた。

### 3.2 可溶性成分、 $\text{SO}_4^{2-}$ 、 $\text{Cl}^-$ 降下量およびpH

図-11に鹿児島市内8測定地点平均の可溶性成分、 $\text{SO}_4^{2-}$ 、 $\text{Cl}^-$ の月別降下量を示す。10年度の可溶性成分、 $\text{SO}_4^{2-}$ 、 $\text{Cl}^-$ の年平均降下量はそれぞれ5.3、0.7、0.4 g·m⁻²·month⁻¹であり、09年度のそれぞれの値(4.7、0.7、0.3 g·m⁻²·month⁻¹)と比較して、ほぼ同程度であった。

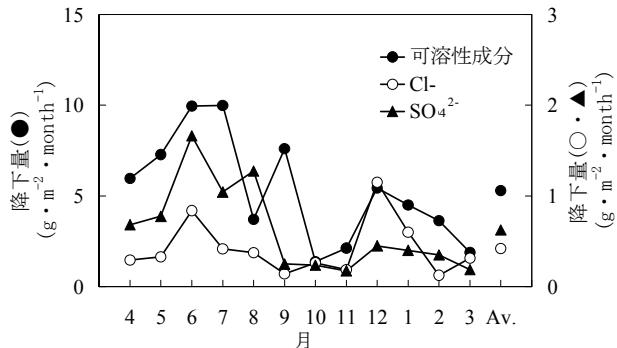


図-11 8地点平均可溶性成分、 $\text{SO}_4^{2-}$ 、 $\text{Cl}^-$  降下量

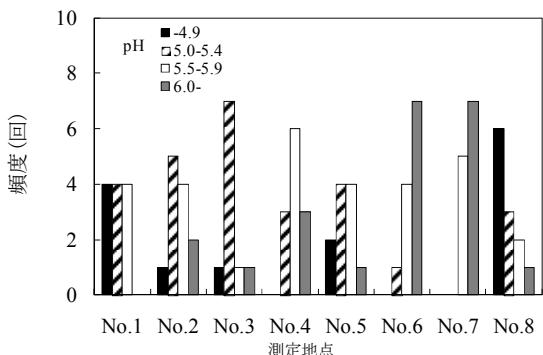


図-12 測定地点別のpH段階別頻度

図-12に、測定地点別のpHの段階別頻度を示す。10年度はpH 4.9以下を記録した回数が、全測定地点についてのべ14回であり、09年度の回数(34回)と比較すると減少した。

### 3.3 大気中の $\text{NO}_2$ 汚染

図-13に、10年度におけるフィルターバッジ法による鹿児島市内8測定地点の大気中 $\text{NO}_2$ 濃度測定値の平均を09年度の場合とあわせて示す。10年度の鹿児島市内8測定地点平均 $\text{NO}_2$ 濃度は、8.4 ppbであった。8測定地点平均 $\text{NO}_2$ 濃度は、06年度までは10 ppb前後で推移していたが、07～09年度は7.0～7.7 ppbであり、これはガソリン価格の高騰や景気の低迷による交通量の減少を反映している可能性がある。10年度の平均 $\text{NO}_2$ 濃度は、07～09年度に比べるとやや增加了。

最も年平均 $\text{NO}_2$ 濃度が高いのはNo.3鹿児島市役所であり、No.4～7の地点も高い値を示した。これは、これらの測定地点が交通量の多い幹線道路の近くに位置しているためである。今回の測定で最も高い $\text{NO}_2$ 濃度を記録したのは2011年2月2日No.5鹿

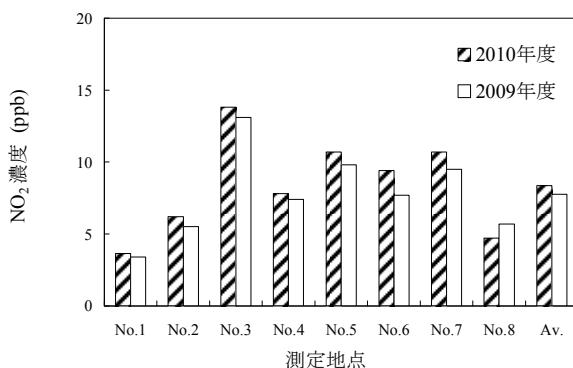


図-13 測定地点別の年平均  $\text{NO}_2$  濃度

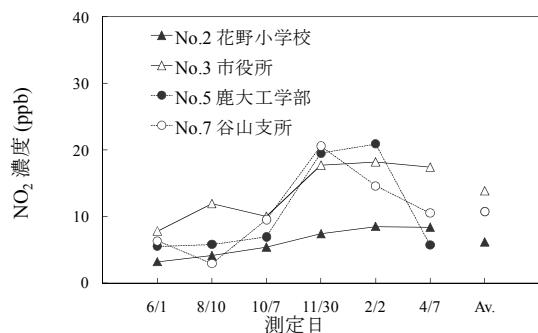


図-14 4測定地点における  $\text{NO}_2$  濃度

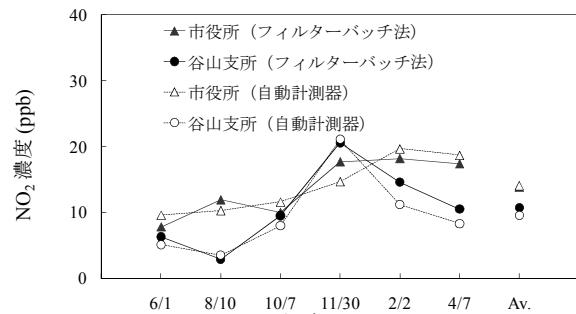


図-15 フィルターパッジ法と自動計測器による  $\text{NO}_2$  濃度

鹿児島大学工学部の 20.9 ppb であったが、この値も環境基準（1時間値の1日平均値が 40~60 ppb またはそれ以下）は満足していた。例年、最も高い  $\text{NO}_2$  濃度を記録するのは No. 3 鹿児島市役所であるが、10 年度は鹿児島大学工学部であった。

図-14 に、No. 2 花野小学校、No. 3 鹿児島市役所、No. 5 鹿児島大学工学部、No. 7 谷山支所における  $\text{NO}_2$  濃度の日変動を示す。 $\text{NO}_2$  濃度は日変動があり、また鹿児島市内の  $\text{NO}_2$  濃度は連動して変動していた。図-15 に、No. 3 鹿児島市役所および No. 7 谷山支所におけるフィルターパッジ法と自動計測器による  $\text{NO}_2$  濃度測定値の比較を示す

が、両者はおおよその一致を示した（自動計測器のデータは 1 h 毎に測定したものを 24 h 平均したもの）。

#### 4. 結論

鹿児島市における 10 年度の年平均降下ばいじん量は  $62.4 \text{ g} \cdot \text{m}^{-2} \cdot \text{month}^{-1}$  であり、09 年度の  $40.4 \text{ g} \cdot \text{m}^{-2} \cdot \text{month}^{-1}$  と比較するとかなり高い値であった。01 年度から低降下ばいじん量の傾向が続いていたが、2006 年 6 月に昭和火口の活動が再開し、これより徐々に降下ばいじん量が増加している。桜島火山の活動は 09 年度より活発になっているので、今後とも注意が必要である。10 年度の大気中の  $\text{NO}_2$  汚染に関しては、09 年度と比べるとやや増加傾向が見られるものの、すべての測定値は環境基準以下であった。

終わりに、調査にご協力いただき、また貴重なデータを提供していただいた鹿児島市役所の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 河井 晴恵, 上山 由貴, 大山 謙二, 中島 常憲, 高梨 啓和, 大木 章(2010) : 鹿児島市の 大気汚染調査(第 23 報). 鹿児島大学工学部研究報告, 51 号, pp. 31-36.
- 2) Leithe, W., 新良 宏一郎(1973) : 大気汚染の測定. 化学同人, pp. 110-112.
- 3) 竹下 寿雄, 前田 滋, 下原 孝章(1979) : 鹿児島市及び桜島の大気汚染調査(第 1 報). 鹿児島大学工学部研究報告, 21 号, pp. 140-147.
- 4) 堀 素夫, 鈴木 伸・榎木 義一, 樋口 伊佐夫(1984) : 大気環境のサーベイランス-測定・設計・解析. 東京大学出版会, pp. 59-62.